

人と制度と戦略の経営史

——拙著『日本企業経営史研究』について

宮本 又郎

本年五月、有斐閣のご好意を得て、

『日本企業経営史研究——人と制度と戦略と』を刊行することができた。宣傳めいて恐縮だが、同書の成立経緯と内容について紹介させて頂きたい。同書は、私が三〇年以上にわたって執筆してきた日本企業経営史関係の一八本の論文を一六章に再編集した上で、五つのサブ・テーマ別に編成して成り立ったものである。

第一部 鴻池善右衛門家の経営史

(以下、括弧書きの数字は章を

表す)

(1) 江戸時代における鴻池家——冒險型から安全志向型へ、(2) 明治初期の企業と企業家——蓬萊社の場合、(3) 土居通夫と鴻池家、(4) 鴻池の多角化挫折——明治後期～昭和初期

第二部 会社制度とコーポレート・ガバナンス

(5) 産業化と会社制度の発展、(6) 総有システムと所有者主権の制限——三井の大元方の場合、(7) 株式会社制度成立期のコーポレート・

ガバナンス——大阪紡績と日本生命保険

第三部 企業家論
(8) 企業家学の意義、(9) 近代移行期における商家・企業家の盛衰、(10) 関西の企業家

第四部 企業成長と戦略

(11) 大阪紡績の製品・市場戦略、(12) 明治期紡績業の生産性、(13) 戦前における日本生命のマーケティング、(14) 酒の数量経済史——明治一七年～平成四年

第五部 市場秩序と経済団体

(15) 近世の市場秩序と株仲間、(16) 戦前日本における財界団体の展開

第一部は、鴻池経営史である。同家の研究は昭和三〇年代から私の前任教・大阪大学経済史・経営史研究室によって精力的に進められ、私が阪大に勤務することとなった昭和四七年までには江戸時代の鴻池研究については一段落した感があった。そこで私は近代に重心をおくことにしたが、その研究関心は江戸時代において三井家と並ぶ豪商とされていた鴻池家がなぜ三井家

のように近代財閥に発展しえなかったのかにあった。明治維新以降昭和初期までの鴻池家の経営行動や資産運用状況を第一次史料に基づき明らかにできたこと、それを先学の近世鴻池研究と接合することによって、三〇年以上に及ぶ鴻池経営史を通観しえるようになったことに、本書の貢献があると考えている。また、同族資本結合の脆弱性、保守的な資産運用方針、人材の欠如が近代における鴻池の停滞原因であったと思う。

第二部では、江戸時代から昭和戦前までの日本の会社制度の展開過程とコーポレート・ガバナンス問題を追究している。江戸時代においては共同企業の経験はあるものの、株式会社制度が成立しなかったわが国において、明治中期以降急速に株式会社制度が普及したのはなぜか、そのため、わが国の株式会社やコーポレート・ガバナンスは

どのような特質をもつことになったか、財閥と株式会社制度との関係は？などが研究課題であった。株式会社草創期の日本におけるコーポレート・ガバナンスの事例を大阪紡績や日本生命の株主総会議事録などの企業内部史料によって検討したこと、日本のコーポレート・ガバナンスは三井家の「総有」にみられるような日本における所有権の特質を踏まえながら論じられる必要があること、戦前日本のコーポレート・ガバナンスはアングロ・サクソン型であったという通説に懐疑を示していることなどが第二部の成果である。

第三部では、シュンペーター以来の企業家論に関する経済学・経営学の学説史的整理を行ったのち、長者番付や企業家列伝を活用して、資産家や企業家の歴史的变化について観察している。結果として、江戸前中期に系譜を



宮本又郎 [著]
『日本企業経営史研究
——人と制度と戦略と』
A5判, 602頁, 定価6825円(税込)

もつ伝統的都市商人が幕末・維新期に没落し、幕末開港から維新期に台頭した新興企業家たちが明治期以降の近代経済発展の主要な担い手となったという近年の通説は過度の図式化で、実際には、江戸期の豪商のなかに幕末・維新期の動乱をくぐり抜けた者もいたし、幕末・維新期に登場した新興企業家たちの多くも松方デフレや企業勃興期に淘汰されたなどの知見を明らかにしている。

第IV部では、個別企業のマーケティング戦略に関して二本、産業史の数量分析に関して二本の論文を収めている。明治一五年創立の大阪紡績は日本で最初に企業的に成功した機械制紡績会社であったが、その競争優位は長くは続かなかった。その原因を製品・市場戦略の推移から探ろうとしたのが第一章「大阪紡績の製品・市場戦略」である。また、明治二二年に日本で三

さまざまであった。その意味で、主体性に欠けるテーマ選択であったということになるが、今日の日本の企業経営の歴史的發展経路を追究するという研究関心では一貫していたと思う。また、本書の副題に掲げたように、「人と制度と戦略と」に、私の関心があったといえる。経済学や経営学のなかで、歴史的研究の優位性を主張するとすれば、それはものごとを長期的に見る視点と、経済・経営現象を複眼的に考察しようとする姿勢であるだろう。右記のようなさまざまなプロジェクトに参加することを通じて、時間的ならびに对象的に視野を広げることができたことを、私としては大変良かったと思っている。

とくにこれらの諸契機のなかで、私にとって重要な意味があったのは社史編纂事業への参加であった。個別企業研究は経営史学の基礎であり、命であ

番目の生保会社として創立された日本生命は創業後一〇年にして保有契約高において業界トップ企業となり、それ以降、長きにわたって、その地位を保持し続けた。この同社の目覚ましい発展過程を同社のマーケティング戦略の面から検討したのが第三章「戦前における日本生命のマーケティング」である。これに対して、第二章と四章は業界資料を使った数量分析で、前者「明治期紡績業の生産性」は企業間競争の視点から、明治と大正初年の紡績企業の労働生産性、資本生産性を観察したもの、後者「酒の数量経済史」は明治中期から平成に及ぶ期間について、酒の生産量、消費量、消費関数、酒と酒税などを数量史的に検討したものである。この四つの論文は四〇代から五〇代に書いたものだが、個別企業の内部史料を使った実証分析や、データの収集・解析に相当の労働を投入し

るが、外部研究者が外部に公表されている資料、情報だけで企業の実相に迫るのは難しい。企業の内部史料や関係者へアクセスできなければオリジナリティのある実証研究は困難である。私は数社の社史編纂事業に参画したが、その過程で学術的に意味のあるトピックスや資料を見つけた場合には、研究にそれらを活かそうと努めた。社史原稿では掘り下げた分析や、研究者としての主張を前面に押し出すことが難しいが、そこで得た学術的知見をそのまま眠らせてしまうのは惜しいと考え、当該企業の許可を得て、学術論文の形にして残そうと努めたのである。本書のなかでは、大阪紡績（現東洋紡績）や日本生命に関する章はそうであるし、第四章も創業一〇〇周年を記念してサントリー株式会社で組織された研究会に参加したことを契機に行った研究である。鴻池研究もまた史料閲覧

を許された鴻池家、鴻池合資会社、旧三和銀行のご好意に依っている。また、これらは各企業関係者からヒアリングしたり、親しく議論する機会でもあり、多くのことを学んだ。学術研究に理解を示された関係企業に謝意を表したい。

私は研究者生活を始めて以来、経済史と経営史の両領域に関係してきた。経済史の分野については、昭和六三年に『近世日本の市場経済』を上梓することができたが、本書において経営史の分野での単著刊行を果たすことができた。そして、両書ともその版元は有斐閣である。採算に合わない学術書出版を二度にわたって引き受けて下さった有斐閣前および現社長江草忠敬氏、貞治氏と、両書の編集を担当して下さい。伊東晋氏に心から御礼申し上げます。

（みやもと・またお 関西学院大学教授）

たことを懐かしく思い出す。ややマニアックなどところがあるが、読者には最も読んで頂きたい部分である。

最後の第V部。国家が提供する法や制度が存在しない場合、あるいはその機能が十分に働かない場合において、市場における取引秩序はどのようにして維持されるかという問題は前著『近世日本の市場経済』（有斐閣、昭和六三年）以来、重要な研究関心事であった。江戸時代についての第一章ではこれを町共同体や株仲間の機能の面から考察し、近代についての第二章では国家と企業の間の中間組織である諸経済団体の機能の面から検討している。

以上に紹介したように、本書が関わったテーマは多岐にわたっているが、各論文の執筆契機も、学会や国際コンファレンスでの報告、研究会、共同研究、社史編纂、出版プロジェクトなど